

1. はじめに

令和6(2024)年11月25日から12月1日にかけて、カンボジア国内の農業・農村および農業水利施設などを視察する研修旅行に参加しました。世情視察も含め、雑多に見聞きして感じたことなどを記述したいと思います。

2. 世情視察

2-1. はじめに

「旅する巨人」と称された民俗学者の宮本常一は、15歳の時に周防大島の故郷から大阪へ出る折、父から十か条を与えられました。その第一は、「汽車に乗ったら窓から外をよく見よ。田や畑に何が植えられているか、育ちが良いか悪いか、村の家が大きいか小さいか、瓦屋根か草葺きか、そういうところをよく見よ。駅へ着いたら人の乗り降りに注意せよ。そして、どういう服装をしているかに気を付けよ。また、駅の荷置場にどういう荷が置かれているかをよく見よ。そういうことで、その土地が富んでいるか貧しいか、よく働くところかそうでないところか良くわかる。」でした。

現代は、ネットを中心に様々な情報が溢れています。しかし、他愛もない情報、誰もが気にも留めていないような情報は、案外薄いように感じます。また、映像処理技術の進化と簡便化で、それら情報の真贋が混沌としている現状もあり、現地に赴き自分の目で見て、肌でその世情を感じることは、現代でも非常に重要と思います。私は、そのような気持ちで、主に車窓から世情を観察しました。

2-2. 地形・気候など

カンボジアは、山がちな国土かと思っていましたが、見渡す限りの沖積平野が続き、現地ガイド氏の話も勘案すると、周辺国との国境付近を除く大部分が平野なのだと知りました。なお、中西部には東南アジア最大のトンレサップ湖(※淡水)があります。また、雨季と乾季に分かれる気候で、私たちが訪問した11月下旬は乾季に当たり、一年で最も過ごしやすい時期とのことでしたが、それでも昼間30℃超で、それなりに蒸し暑さを感じました。但し、明け方は20℃を下回り、やや肌寒くもありました。

2-3. 街並みなど

概して想像通りの雑多な街並みでしたが、首都プノンペン(人口約170万)市街には高層ビルも建ち、経済発展の様子が窺えます。また、地震が殆ど無いようで、RC建築物の柱はどれも細いものでした。街並みの看板は、公用語のクメール語のほか、特に首都プノンペンやその近在で中国語(簡字体)が非常に多く、中国政府の「一帯一路構想」で、潤沢に資金が流入している様子を目の当たりにしました。

通りの商店は、大半が個人経営の小商いです。同じような食料品や雑貨を並べているお店、プラスチックの椅子とテーブルを並べる食堂などが連なっているものの、昼間はあまりお客を見かけません。

店主も所在なげで、特に郊外だと、ハンモックを掛けて寝ている様子を見かけることも少なくありませんでした。一方、ホテルからバスに乗って視察先に向かう朝、それらの食堂でご飯を食べている人々を見かけましたので、大都市の首都プノンペンですら、人々の生活サイクルがまだ均質的なのだろーと感じました。

なお、カフェなどでは、チェーン店も時折見かけました。また、少ないながらセブンイレブンなどのコンビニも見かけましたが、店内の客は日本に比べると非常に少なく、日本人の私から見ても飲み物・アイス・弁当など、全く割安感の無い価格設定でしたから、一般的なカンボジア国民(※平均年収 1,300 米ドルとのこと)からすると、かなり敷居が高いのだろーと思います。また、首都プノンペンで日系スーパーのイオンモールに立ち寄りました。火曜日の夕暮れ時、食品売り場に幾らかお客が居たものの、専門店街は閑古鳥です。ダイソーが 1.8 米ドル均一で日本国内と同じ雑貨類などを販売していましたが、お客はゼロでした。

工業は、繊維業が盛んだと現地ガイド氏がお話していました。このため、大きな煙突を有するような重工業系の工場は、一度も見かけませんでした。

ほかに気になったのは、物乞いの少なさです。首都プノンペンに 2 泊、アンコールワットなどの遺跡群を抱える観光都市シェムリアップ(人口約 14 万)に 2 泊、また両都市の中間点に位置する州都コンポントム(人口約 3 万)に 1 泊しましたが、首都プノンペンで 2 人の物乞いを見かけたのみでした。1 人は路上の老婆。もう 1 人は、王宮の見学者用駐車場で、両腕片脚を失った中年男性です。残った腕の上部にバケツをぶら下げて、器用に車椅子を駆使し、物乞いをしていましたが、彼の身なりは小ざっぱりとしていました。

また、路上や店前で野良なのか飼い犬なのか分からぬような犬を沢山見かけました。現地ガイド氏は「噛まれたら大変」と追い払うよう努めていましたが、殆どの犬が私たちに我関せずでした。そして、車の往来をよく観察し、道路を渡る様子が印象的でした。一方、猫はあまり見かけませんでした。

車窓から受けた街の印象は、決して豊かでないが、極端に貧しい訳でもないというところですか。少なくとも、食べ物に事欠くような時代は、過去のものとなった様子です。また、授業が終わり学校から出てくる首都プノンペンの中高生たちは、結構な割合でスマホを持っているようでした。

2-4. 交通

(1) 道路と走行車両

首都プノンペンも観光都市シェムリアップも、主要道路は全て舗装されていました。一般自動車とトラックとバイクが混在して走行し、特に首都プノンペンで朝の交通渋滞が酷く、モータリゼーション化の急速な進展が窺えました。信号機は非常に少ないのですが、特に交通量の大きな交差点では、ロータリーを効果的に配しているように見えました。

なお、交差点などで交通の混乱が生じている様子も



【写真1】首都プノンペンの街角



【写真2】首都プノンペンの朝ラッシュ

見かけませんでした。現地ガイド氏の説明に拠れば、譲り合いの精神が根付いており、「我先に！」という運転は殆ど無いそうで、確かに私たちを乗せたバスが市街地の大通りを塞ぐ形で U ターン or 隣接敷地内へのバック駐車をすることも、黙って停車してくれていました。車窓から各車輻の走行を見るに、急なハンドル操作や急発進・急ブレーキをしないという不文律が、混沌とした車道に秩序を与えているのだと感じました。また、乗用車の車種に関しては、トヨタが半数超のシェアを持ち、これにアメリカのフォードと韓国の現代が続き、時折マツダを見かけました。ほか、日産やホンダ、三菱の販売店も見かけましたが、走行している姿はあまり目撃出来ませんでした。一方、バスに関しては現代一強です。そして、バイクはホンダが半数超のシェアと感じました。なお、バイクは 125cc 以下だと免許不要とのことで、高校生くらいの子が普通にバイクを運転していました。ちなみに、ヘルメットは義務とのことですが、暑いので被りたがらないそうです。従って、ヘルメットの装着率は、5 割強といったところでした。

また、首都プノンペンと観光都市シェムリアップは、国道 6 号線により 320km 余で結ばれています。私たちは、中間に位置する州都コンポントムに 1 泊する行程で、全線をバスで移動しました。なお、全区間が舗装路です。しかし、20 年前は未舗装状態だったため、トンレサップ湖を利用し、フェリーで往来するのが交通の主流だったそうです。また、本国道は首都プノンペン付近を除き、片側 1 車線の対面通行でした。但し、かなり広めの 1 車線でしたから、1.5 車線と表現した方が適切かもしれません。なお、道中の追い越しは、かなり無理のあるタイミングと感ずることが多かったものの、対面側も対行車の追い越しに寛容で、減速してあげて衝突を回避する不文律が存在するようでした。

なお、高速道路はまだ僅かな開通にとどまっているようです。私たちは、首都プノンペンの中心部から西へ約 65km に位置するローレンチェリー頭首工を視察する際に往復利用しましたが、交通量が少なくサービスエリアも閑散としていました。

(2) 鉄道と空港

カンボジア国内の鉄道網は、かなり貧弱な様相です。首都プノンペンからタイ国境ポイペトを結ぶ北線 385km、および首都プノンペンとタイランド湾に面するリゾート地シハヌークビルを結ぶ南線 263km の 2 路線のみで、内戦により荒廃したものが漸く近年に復旧したそうです。また、ベトナムやラオス側へ抜けるルートや、観光都市シェムリアップを経由し首都プノンペンに至るルートなどの計画もあるようですが、具体的な進展はまだ無い模様です。

空港は、首都プノンペンと観光都市シェムリアップ、およびリゾート地シハヌークビルの 3 都市にあります。私たちは、往路にプノンペン空港、帰路にシェムリアップ空港を利用しました。どちらも近代的なターミナルです。この内プノンペン空港は、中国資本で市街の反対側へ移転させる計画が進んでいるとの話でしたが、現空港についてさほど古びた感じも、窮屈な感じもありませんでした。また、シェムリアップ空港は、旧空港を廃止し 2023 年に新規開業したそうですが、巨大なターミナルを持て余しているように見えました。

3. 農業・農村などの視察

3-1. はじめに

車窓からの観察で、沖積平野の広がる国土は、農業国としてのポテンシャルが非常に高いのだろうと直感出来ました。しかし、かんがい排水の整備が、著しく遅れている様子も解りました。

私たちは、首都プノンペンの中心部から西へ約 65km に位置するローレンチェリー頭首工を視察し

ました。また、州都コンポントムの北で国道 6 号線から分岐する国道 62 号線を小 1 時間ほど北上したところにある、カシューナッツなどを大規模栽培するコサル農場と、観光都市シェムリアップ近郊のプレアダック村の稲作ほ場(※観光農園を経営)も視察することが出来ました。加えて、首都プノンペンと観光都市シェムリアップ間の移動では、途中 1 泊した州都コンポントム以外、農地や荒撫地、小さな集落ばかりでしたので、車窓から農業・農村の風景を観察することが出来ました。これら視察と観察で得た知見を記述したいと思います。

3-2. 稲作ほ場とかんがい排水

かんがい排水の整備は、著しく遅れている様子が現地での説明や車窓から、良く解りました。最も気温の落ち着く 11~12 月でも昼間真夏日になるカンボジアでは、2 期作が十分可能とのこと。しかし、大部分を占めるかんがい手当の無い農地では、雨季の 1 期作しか営農出来ず、生産性が低いままです。また、既存のかんがい施設は、特に波尔・ポト政権時代に造成された用水路で、水路勾配がゼロだったり逆勾配だったり、農地より水面が低かったりする場合も少なくないそうです。

写真-3 は、観光都市シェムリアップから車で 1 時間ほど西に位置する稲作ほ場ですが、写真手前の水路からポンプ揚水でかんがいしていました。但し、ポンプの燃料代負担が非常に大きく、営農の利益が十分に得られないそうです。なお、現地ガイド氏を通じ現地住民に確認したところ、この水路は波尔・ポト時代に造成されたものでないそうです。

また、写真-4 は、写真-3 より数 km ほど一本道を南下したトンレサップ湖に近い稲作ほ場です。同湖の面積は、乾季で 2,500km²(※琵琶湖の 1/4)ですが、雨季になると 16,000km² 程にまで広がるそうです。そして、この地域は雨季に湖底となってしまうため、湖の水が引く乾季だけ営農出来るそうです。そして、乾季に入り水が引き始めたため、農民たちが畦畔上で準備作業を始めている様子でした。



【写真3】 ポンプ揚水の稲作ほ場



【写真4】 湖の水が引き始めた稲作ほ場

なお、前出プレアダック村(約 1,700 世帯/8 割が農民/16 世紀頃の成立)の観光農園では、農園主(30 代前半~半ばくらい)から様々な営農の情報を得ることが出来ました。以下に列記します。

- ・営農面積は 2ha(※全て稲作)で傍系を伴う 6 人(妻/子/兄/姉/甥)家族。農地はすべて相続した土地。
- ・収穫物は販売せず、すべて自給に供しています。かんがい未整備の農地であるため、雨季の 1 期作。
- ・昔は田植えをしていましたが、現在は直播栽培。雨季の単収は、2.0t/ha 程度。
- ・営農は、全て手作業です。コンバインを所有する農家は村内に居ません。
- ・コンバインを借りて収穫する農家は居ますが、25~50 米ドル/ha のリース料を要します。
- ・種まきや稲刈りなどでは、親戚や友人のほ場と相互に無償で手伝い合います。

- ・ 互助関係に無い人に手伝って貰う場合は、5～6.25 米ドルを支払います。
- ・ 現金収入は、乾季に勤める観光ガイドと英語講師で得ています。また、観光農園を経営しています。

我が国においても、農作業が機械化する以前の時代、「結」や「もやい」と称す農民たちの互助関係が存在しました。そして、今回カンボジアにおいても同種の慣行があることを知りました。

なお、本観光農園は、自家の稲作ほ場が見渡せる自宅敷地内に設けられた施設です。胡弓のような民族楽器の演奏で出迎えられ、稲の収穫や脱穀など農作業の実演を見学出来るほか、椰子ジュースや砂糖を餅で包んだ菓子などが振る舞われました。入園料は、20 米ドル/人だったようです。一方、観光農園内に居た「従業員（※家族と親戚縁者のようです）」は、8 人くらいだったと思いますから、平均年収 1,300 米ドルからすれば、なかなか実入りの良い商売と感じました。

また、コメを販売する場合 0.23～0.27 米ドル/kg 程の買取り価格になるそうです。また、乾季に営農出来るほ場が少ないため、乾季に栽培したコメの方が、収穫時期の相場見合いで高く売れるそうです。ちなみに、品種による買取り価格の違いは無いとのこと。なお、仮に 2.0h で収穫されるコメ約 4.0t を全て売却したとして、得られる収入は 920～1,080 米ドルに過ぎません。従って、現実には観光農園と観光ガイド、英語講師が彼の本業になっているのだろうと思います。

3-3. コサル農場

流暢な日本語を操るコサル氏(30 代後半)が営む農場は、前出のとおり州都コンポントムから 1 時間ほどの場所にあります。彼は、カンボジア南部の農家の出身で、国内の農業大学院卒とのことでした。義務教育制度の不十分な同国において、大学院まで通っている（※農場の管理を任せている弟も大卒）のですから、極めて裕福な実家なのだろうと思います。実家は兄が継ぎ、彼は大学院を卒業して間もない 2010 年に 20ha の稲作ほ場を購入し、農業を始めたそうです。その後、徐々に周辺農地を買い集め、現在は 110ha の農場主です。なお、彼の妻は、カンボジア難民として日本で育った女性とのことでした。20ha の農地を購入する資金は、日本人に融資して貰ったとの話でしたから、恐らく彼の妻の人脈なのだろうと想像しました。昨今は、北九州大学との縁で時々訪日しているそうです。

彼の農場では、カシューナッツ栽培に 70ha を充てています。木の配置を 6m/7m/8m の 3 間隔で試しているほか、無農薬栽培のエリアを設けるなど、研究熱心な様子が随所に窺えました。



【写真 5】カシューナッツ農園



【写真 6】バナナの花を説明するコサル氏

また、ほかに天然ゴムをはじめバナナやマンゴーなど計 20 品目を栽培するほか、牛を 100 頭程飼養しているそうです。この内、マンゴーは国内で広く生産されているため、品質で差別化させられるよう、栽培法の試行錯誤を重ねているとのこと、カシューナッツに続く主力商品に食欲を探している

様子が分かりました。なお、写真-5の地面に置かれているのは、養蜂箱です。

そして、彼は栽培だけでなく加工や包装も自社で行っているそうですが、農場を彼個人の名義、加工と包装を法人企業化しているとのこと、万事抜け目がありません。そして、加工に関しては、敢えて機械化せず地域の人たちを雇い入れるなどし、雇用創出を通じた地域住民との融和にも配慮していました。写真-7は、農場内の建物で収穫したカシューナッツの皮剥き作業をする女性たちです。なお、農場の従業員は普段10～20人程ですが、繁忙期だと60～70人を雇い入れるそうです。

彼が故郷から遠く離れた当地で農場を始めた理由については、カシューナッツを栽培する適地と踏んでのことだったようですが、ほかに首都プノンペンと観光都市シェムリアップの中間地点であることも考慮したとのこと、販売市場までのアクセスを見据えた戦略的な選定だったのだと感心しました。

なお、彼が生産・加工・包装したカシューナッツをお土産に頂きました。帰国後に食べましたが、身が大きくしかも甘みがしっかりあって、非常に美味でした。首都プノンペンの前出イオンモールなどで販売しているそうですが、青年実業家の彼の姿を日本のテレビで見かける日は、そう遠くないと感じました。



【写真7】カシューナッツの皮剥き作業

3-4. その他農村など

カンボジアの農村は、高床式の住居が主流の様子です。現地ガイド氏の解説に拠れば、「蛇や動物などが入ってこないよう」「洪水に耐え得よう」「暑気への対応」が、高床式としている理由とのこと。また、古い中国の文献にも当地の住民たちが高床式の住居で暮らしている様子が記述されているそうですから、昔からの伝統なのだろうということでした。なお、集住形態です。

また、車窓から収穫後の稲作ほ場に放牧される牛をよく見かけましたが、牛舎のようなものは見かけませんでした。大きくなったら肉牛として出荷するそうです。牛を多く飼養している農家は、裕福な農家だと現地ガイド氏が言っていました。

4. ポル・ポト政権下の大量虐殺について

カンボジアと言えば、ポル・ポト政権下での虐殺が頭に浮かぶ人も多いかと思います。前政権を打倒し、1975年4月から1979年1月までの3年8カ月の間、同国を支配した独裁者のポル・ポトは、全国民800万人の1/5に当たる150万人の自国民を死に追いやり(※虐殺や餓死など)しました。自国の他民族を迫害したり、他国への侵攻で現地住民を虐殺する例は、数多あるように思います。しかし、自国民の同胞を手当たり次第に収容し、拷問を加えて大虐殺した例は、他にあまり聞いたことがありません。

このことについて、長年「何故なのか」と疑問に思っていました。進んで調べようとはしてきませんでした。しかし、今回カンボジアに赴くことになったため、「ポル・ポトの悪夢-大量虐殺はなぜ起きたのか-(論創社/井上恭介・藤下超)」という本を購入し、往路機中で読みました。

しかし、読破した結果は「なぜそのような虐殺が行われたのか、よく分からない」との感想でした。このことは、現地ガイド氏も「なぜなのか、分からない」と説明していましたから、読んだ本の出来

が悪かったという訳でもなさそうです。なお、現地ガイド氏の父は、警察官だった過去が誰かの密告により発覚してしまい、連行されて帰らぬ人になったとのお話でした。

虐殺の深層的動機はあやふやなままですが、「知識人を迫害」「農村への下放」「出自などによる身分隔離(※カンボジアでは新人民・旧人民の区分)」「荒唐無稽な経済計画」「現場での取り繕い(=員数合わせ)」「激怒し孤立感を深める独裁者」「密告の奨励」「粛清・憎悪の連鎖」といった一連の動きは、程度の差こそあれ、他の独裁国家や組織などにおいても見受けられるか見受けられた現象と思います。この内、「員数合わせ」は、評論家・山本七平が自著「一下級将校の見た帝国陸軍」において、我が国の旧軍でも蔓延していたことを、自身の体験から鋭く指摘しています。現在でも製造メーカーなどにおいて検査数値などの改竄が連続的に発覚する様子を見るにつけ、そのような組織文化が根強く残存しているような気がしてなりませんので、決して他人事でも無いと感じます。

そして、私たちは首都プノンペンの「テュールスレン虐殺博物館」を見学しましたが、収容所として使用された元学校をそのままの姿で保存していました。虐殺された人々は、生前1人ずつ顔写真を撮られた上、尤もらしいスパイ容疑の自白を強要され、殺されていったそうです。

5. 終わりに

カンボジアを6日間視察し感じたことは、3-1項にも述べたとおり、農業国としてのポテンシャルの高さです。カンボジアの国土面積は18万km²(※日本の約半分)ですが、その約1/3に当たる610万haが農用地です。我が国の農地は約430万haですから、国土に占める農地面積の大きさが理解出来ると思います。また、主要作物はコメですが、2021年の生産量が1,141万トンで、我が国の1,053万トンを凌駕しています。一方、かんがい整備は遅れており、かんがい用水の利用率が雨季30%・乾季6%にとどまっています。従って、かんがい施設の整備を進めれば2期作も可能となり、生産量が飛躍的に増大すると見込まれます。なお、波尔・ポト政権時代には、3期作までが行われていたようです。また、車窓から農地を眺めていると、排水整備で農地化出来そうな土地も散見出来ました。従って、農地面積自体も、土地改良事業で拡大できるものと推察します。但し、現在のカンボジアは、国が積極的にかんがい排水整備の推進を図るという方針でもない様子のため、質問した農民も半ば諦め顔でした。

なお、カンボジアの現在の人口は、約1,700万人です。そして、主力のコメは2021年に415万トンを超えて海外へ輸出しています。今後、生産量の拡大を図った場合、脆弱な輸送インフラが課題となるように感じました。国道は舗装されていましたが、高速道路網の整備がこれからです。また、輸出を見据えた大量輸送の観点からすると、鉄道網の貧弱さは特に大きな課題になっていくだろうと思います。

ちなみに、今回方々で長粒種の白飯を食べました。1993年の大冷害では、タイなどから多くの長粒種米を緊急輸入し食卓に供されましたが、粘りが無く臭いがあるなど概ね不評でした。しかし、今回食べた白飯は臭みも無く、それなりに粘り気もあり、少なくとも不味いと感じませんでした。

最後になりますが、今回の海外研修を企画していただきました北海道土地改良設計技術協会の皆様、スムーズな旅程に尽力してくださいましたJTBの皆様、現地ガイドのチャンヤ氏、そしてご一緒しました協会員会社の皆様、どうも有難うございました。

(株式会社三幸ランドプランニング)